

「日文研問題」をめぐって

二〇一六年九月十一日（金）

宮地 正人（東京大学名誉教授）

仁藤 敦史（国立歴史民俗博物館教授）

井上 章一（国際日本文化研究センター教授）

司会：倉本 一宏（国際日本文化研究センター教授）



はじめに

倉本一宏

一九八五年四月に「国際日本文化研究センター」設立構想が公にされ、翌一九八六年四月に設立準備室が発足すると、歴史学関係の各学会では、これに反対する運動が沸き起こり、「声明」の発表が相次いだ（「学界」ではなく「学会」である。念のため）。

歴史学研究会は「広範な学会の総意を結集できるような民主的な設立準備体制を再構築するように強く要求」し（『歴史学研究』五六五、一九八六年三月）、日本史研究会は計画の「白紙還元を重ねて要求」し（『日本史研究』二八四、一九八六年四月）、考古学研究会は構想の「白紙還元・再検討」を強く求め（『考古学研究』一二九、一九八六年六月）、歴史科学協議会は「衷心からの危惧と憂慮を表明するとともに、同センターの今後の展開において、適宜私達の態度をあきらかにしていくこと」を決議している（『歴史評論』四三九、一九八六年十一月）。

また、日本歴史学協会には一九八六年九月に「国際日本文化研究センター」特別委員会」が設置され、「同センターの動静把握とその対応に努め」、その結果、「埴原和郎氏が研究調整主幹であることが判明」したとの由である（『歴史学研究』五七八、一九八八年三

月）。

一九八六年十二月十三日には専修大学神田校舎においてシンポジウム「国際日本文化研究センター」の現状と問題点」が開催されている（『歴史評論』四四二、一九八七年二月）。ここでは約八十の学会と日本学術会議の歴史学研究連絡委員会委員・日本歴史学協会委員に参加を呼びかけた結果、十三団体、四十二名の参加を得た。吉田伸之・宮地正人両氏が問題提起を行なわれ、加藤幸三郎・黒田俊雄・直木孝次郎・桜井清彦各氏が発言されている。それにしても、関西から黒田氏や直木氏が参加されているというのは、この問題に対する関心の高さを示しているものと言えよう（八十の学会等と呼ばれて参加が十三団体というのは、いささか少ないような気もするが）。

その後も日本史研究会は、国際日本文化研究センター（日文研）で国際研究集会が開かれる度に「オブザーバー」参加して「点検」を行ない、その報告を載せている（『日本史研究』三二三、一九八八年九月、『日本史研究』三二八、一九八九年十二月、『日本史研究』三三五、一九九〇年七月）。国際研究集会を結構楽しんでおられるようにも読めるのであるが。

これらの学会が日文研の設立に危惧の念を懐いたのは、日本史研究会の「声明」に端的に集約されている。第一に、計画が「当初から一握りの人々だけの見解を基礎に作り上げられようとしたもの」で、日文研が推進しようとしている共同研究も「学問として最小限

必要な科学性と実証性から離れ、単なる（思いつき）か、低俗な実用主義に陥りかねないし、その主張者は（独善）と（思い上がり）の誹りを免れない」点、第二に、日文研の組織が「果たして研究機関としての自主的・民主的で、真に構成員の創意を結集する組織的保障が得られるものかどうか、大いに疑問が残る」点、第三に、計画全体の推進が梅原猛氏や上山春平氏らの、いわゆる「日本学」に基づくものであることは一目瞭然といたうえて、この「日本学」が日本文化の国際的・学際的・総合的研究の方法・視角として、大方諒解を得ているわけではない」点である。

そして中曽根内閣が進めてきた「新たな国家主義による国民の統合を促すための、いわばその理論的・思想的中核をつくりだすという、きわめて強い政治的役割と使命とをこの計画に期待している」として、その政治利用への「重大な懸念」を表明している。

考古学研究会はさらに、新納泉氏の「展望」を載せている（新納泉「国際日本文化研究センター」構想と「梅原日本学」『考古学研究』一二九）。「梅原日本学」の問題点を詳しく分析されて、「もはやこれは学問とは言い難い」と結論付けられている。「梅原氏が」首相の宣伝に一役買っているのを見ると、本当に人間とは恐ろしいものだと感じざるをえない」とされたうえて、井尻正二氏の文章を引き、「戦争は、財閥や軍閥だけがおこすのではなく、科学者も文化人も、その責任の一端をになつていて、という反省が、今ほど必要

などときにはないのではないだろうか」と締めくくられている。

なお、先に挙げた「シンポジウム」では、宮地氏が、「創設準備室長梅原猛氏の学者としての資格」を指摘され、梅原氏が「国立大学共同利用機関の長等の選考基準（七七年文相決裁）」人格が高潔で学識がすぐれ「に適合しない」ことを問題とされている。

各学会が批判した内容については、御説ごもつとも感じる部分もあるし、それは違うんじゃないかと思う箇所も多い。各学会にしても、一九八七年五月二十一日に完成して以降の日文研を見て批判しているのではなく、主に設立構想時の書類を見て、また当時の内閣への批判とリンクさせて批判しているのであるから、しばしば的外れな批判を行なつていても、致し方ないところであろう。

それでも当たっている点多々存在するのは、慧眼と称すべきであらうし、現在の日文研がそれらをすべて克服しているかと言え、はなはだ心許ないのも、また事実である。私など、日本史研究会の共同研究への批判を読み返してしまった。

ただ、「特別委員会」まで作つて動静を注視し、あれほど激しく批判したのであるから、設立以降の日文研の動静にも関心を持つていただきたかつたし、そろそろ創設三十年を迎える日文研に対して、現時点での評価を下して下さつてもいいのではないかという気も、ずっとしていた。だいたい、「委員会」はその後、どうなったのであろうか。現在も活動を続けられているのであろうか。不明にして、

その後の誌面からは探すことができなかつた。なお今回、各学会誌の日文研批判のコピーを井上章一氏（ただ一人の設立時からのメンバー）に見せたところ、「昔は気に掛けてくれてたんやねえ」と感慨深げであつた。

今般、『日本研究』の特集の一環として、二〇一六年九月十一日（日）に、当時、批判の最先端に立つておられた宮地正人氏、その下部にあつた仁藤敦史氏、そして井上章一氏による鼎談を行なつた。あの頃、当事者の方々は日文研をどのように見ておられたか、そしてそれは時間の推移と共に、どう変化していったか、あるいはしなかつたのか。とりわけ、あの「委員会」はその後、いつたいつたのか。

当時、「各学会」に所属しておられた方々も、共同研究会のついでということも多く傍聴に来られ、「鼎談」は緊張感を孕んでスタートした、はずであつたが、すぐに和やかな雰囲気となり、和気藹々と進んでいった。しかし、各人の発言内容は多くの主張と皮肉と「いけず」を含み、結果的には、きわめて意義深い「鼎談」となつたものと考えている。

もつとも重要な論点であると私が感じたのは、一九九一年ごろから、「日文研が所長（梅原猛）の学説とは無関係に自由な研究を行ない、「正常な軌道」に乗っていることが「確認」された」ということで、一九九四年九月を以て「委員会」が解散されたことを知ら

されたという点である。「もつと早く言つてよ」という感じではあつたが（この「鼎談」がなければ、我々は永遠にこれを知ることにはなかつたのであろうか）、とまれ、この時点で、日文研は健全な研究機関として、めでたくも「認定」されたことになる。

奇しくも同じ一九九四年の十一月七日、天皇・皇后両陛下が日文研を訪問している。まさか両者に関連は有るまいとは思うのであるが、興味深い符合ではある。さらには、翌年の一九九五年五月に梅原猛所長が退任され、河合隼雄氏が第二代所長に就かれることとの関連は如何かなど、興味は尽きない。

もう一つ付け加えると、当初はご参加をお願いしていた、京都（もちろん、まちなか）に本部を置く日本史研究会からは、この「鼎談」に誰も参加していただけなかつたという点を、どのように解釈すればよいのであろうか。実はこの辺りに、現在にまで続く「日文研問題」問題の本質が隠されているのではないかと懸慮するのであるが、それについては将来の課題としておこう。

以下、「鼎談」をそのまま文字化したものである。

パネリスト紹介

宮地 正人 1944年、福岡県久留米市生まれ。日比谷高校、東京大学文学部国史学科卒業、同大学院人文科学研究科博士課程後期（国史学専攻）中途退学。東京大学文学部助手を経て、1973年同史料編纂所入所、1995年度より2年間所長を務める。2001年、国立歴史民俗博物館第5代目館長となり、2005年退職。現在、東京大学名誉教授。専門は日本近代史、史料編纂所では維新史に取り組む。著書は『日露戦後政治史の研究』（東京大学出版会、1973年）を初めとし、『天皇制の政治史的研究』（校倉書房、1981年）、『国際政治下の近代日本』（山川出版社、1987年）、『幕末維新期の社会的政治史研究』（岩波書店、1999年）、『幕末維新変革史』（岩波書店、2012年）など。最新作は『歴史のなかの『夜明け前』——平田国学の幕末維新』（吉川弘文館、2015年）。

仁藤 敦史 1960年、静岡県焼津市生まれ。静岡高校、早稲田大学第一文学部日本史専攻卒業、1989年同大学院文学研究科博士課程史学（日本史）専攻満期退学。早稲田大学文学部助手を経て、国立歴史民俗博物館に着任。助手、准（助）教授を経て、現在、教授。2012年から2年間、総合研究大学院大学の日本歴史研究専攻長を務める。専門は、日本古代史（王権論・都城制成立過程の研究）。著書は『古代王権と都城』（吉川弘文館、1998年）を初めとし、『古代王権と官僚制』（臨川書店、2000年）、『女帝の世紀——皇位継承と政争』（角川選書、2006年）、『都はなぜ移るのか——遷都の古代史』（吉川弘文館、2011年）、『古代王権と支配構造』（吉川弘文館、2012年）など。日文研設立当時は大学院生で、歴史学研究会委員であった。

井上 章一 1955年、京都府生まれ。洛星高校、京都大学工学部建築学科卒業、1980年同大学院修士課程修了。京都大学人文科学研究所助手を経て、1987年、国際日本文化研究センター助教授、現在、教授。2013年度から3年間、副所長を務める。日文研設立前の準備会から関わり、今も残るただ1人の設立時の教員である。建築史家、風俗史研究者。著書は『霊柩車の誕生』（1984年／朝日文庫、2013年）を初めとし、『つくられた桂離宮伝説』（1986年／講談社学術文庫、1997年）、『美人論』（1991年／朝日文芸文庫、1996年）、『関西人の正体』（1995年／朝日文庫、2016年）など。最新作は『京都ざらい』（朝日新書、2015年）。

●倉本 それでは、鼎談「日文研問題」をめぐって——正確には、「日文研問題」問題をめぐって」と言いたいところですが——を、始めたいと思います。

まずお三方にお一人ずつお話しいただきまして、それに対して少しずつコメントをいただきます。今日は共同研究「説話文学と歴史史料の間に」もやっておりまして、共同研究員の方で傍聴しておられる方もいらっしゃると思いますので、後ほどご発言いただくこともあるかもしれません。

それでは、宮地さんからお願いいたします。

●宮地 私は、日文研（国際日本文化研究センター）に関しては三つの角度で関わってきたので、自分の活動を回想するかたちとなります。

日歴協特別委員会として

第一は、日本歴史学協会国際日本文化研究センター特別委員会委員としての活動です。言うまでもなく、一九八〇年代の前半から日文研の設立については歴史学界で大きな問題になっており、歴史学界全体の集まりである日本歴史学協会（日歴協）でも日文研問題を取り上げなければいけないということで、特別委員会が設置されました。一九八六年九月二十日のことです。委員長には専修大の加

藤幸三郎さん（経済史）が選ばれ、私もメンバーに入りました。特別委員会第一期は二年間（計五回）続けました。この特別委員会の課題としては、当面は情報を極力各学会に提供するパイプ役を果たすこととして、あわせて創設準備室関係者との懇談ないし意見交換の場を設定しようということになりました（第二回特別委員会）。

一九八七年の一月三十日、まだ東京にあった創設準備室へ特別委員会が行き、懇談しました。このころ応対してくれたのは園田英弘さん（当時、創設準備室次長・社会学）です。

そして、日本学術会議にもこの問題を提起しようということで、八七年四月の一〇二回総会に向けて、日本学術会議歴史学研連絡委員会が報告を出しています。

日文研の発足は、ご存じのとおり八七年の五月二十一日です。

その後、京都に訪問することになり、六月二十九日、京都の仮事務所に秦明夫管理部長と園田助教を訪問、質疑・懇談しました。

八七年七月の第四回委員会では、次の三つの確認事項を特別委員会として確認しました。一番目が学会レベルでの諸要求の受け入れ窓口、あるいは受け入れ方法等の確認をすること。二番目は、日文研が国立大学共同利用機関になりましたので、そのあり方について確認すること。三番目は、今後の人事計画などについて日文研と連絡をとりつつ、動向に留意することです。

その年の十一月二日、留学から帰ってこられた研究調整主幹の埴



原和郎さん〔当時、教授・人類学〕を、東大の理学部に訪問して、現状をお聞きしました。

一九八八年の七月から新しい期の特別委員会が動き出し、十一月二十一日には日文研の仮事務所を訪問しました。もうこのときから村井康彦先生〔八七年十月より教授・日本史〕に対応していただきましたが、露骨に嫌な顔をなさっていました。

第四回特別委員会は一九八九年十一月十七日に行われました。これは最近の日文研の状況について、当時からかなり問題になっていた国際交流基金が現代日本文化研究センターをアメリカに設置すると

いう動きが、どう展開するかということも課題となりました。

一九九〇年の第三回日文研国際研究集会は公開講演会になったようで、梅原猛さん〔当時、日文研所長・哲学〕は、その公開講演会に先立つ挨拶の中で、「日文研を国家主義的組織とする外国の一部の見方を否定して、右にも左にも極端に片寄らないすぐれた研

究者を受け入れる」と述べた、というのが日歴協の記録に残っていません。

この年の十一月十九日、日本史研究会の後、みんなで新築一部移転中の日文研を訪問して、当時、情報管理施設長になっていた濱口恵俊さん〔一九八八年十月より教授・社会学〕と懇談しました。それから、正式に建物が完成して、開所式になったのが、一九九〇年の十二月十日。

日歴協の次の期は一九九一年から。このときから三年で委員会が交代するようになりました。また、この時期から日文研が正常な軌道に乗ったことから、委員会の目的は日文研活動の内容を各学会に周知させる、現在、どういような体制で、どのような運営委員会の構成がなされているかという、その情報提供に変わりました。

一九九一年十一月には、また日文研の現状を見せていただくために訪問し、このときには村井先生に対応いただきましたが、円形ドーム型の図書館をかなり自慢なさっていました。またコンピューター室を案内してもらいました。

翌年も十一月二十日、日本史研究会の後で訪問し、このときには村井先生に、京都新聞に連載された「満5年の日文研」という記事をお渡しいただきました。日歴協の委員会報告によると、加藤委員長は、七月二十三日掲載の脇田修氏〔当時、大阪大学教授・日本近世史〕による「今は新国家主義という心配はしていない。（中略）今

後も慎重な運営を続けてほしい」との発言を日歴協への報告の際、引用しています。したがって、心配していた新国家主義の方向に日文研が動かないということが、日歴協の特別委員会でも確認されたのがこの時期です。

結局、特別委員会というのは使命が終われば解散しますから、一九九四年九月の新しい期の委員会で解散、つまり目的を果たしたということになります。これが歴史学界として一番はつきり組織的な対応をした日歴協の動きです。

『歴史評論』編集長として

二番目は、『歴史評論』と国際日本文化研究センターという話になります。なぜ歴史学界がこの日本文化論を問題にせざるを得ないか。日本近代史をやっている方々には言うまでもないことですが、軍部ファシズムに猛威を振るつたのが日本文化論、『国体の本義』（文部省編纂、一九三七年）だからです。この問題が提起されて以来、『歴史評論』としても私としても注目し続けていました。私は一九八五年の五月号より『歴史評論』の編集長になったので、編集と歴史科学協議会（歴科協）の大会企画そのものを通じて、この日文研批判に関わるようになったわけです。

後の討論の中でも出てくると思うのですが、日本文化論がなぜこれだけ大きい問題になったかという点、やはり客観的には、天皇在

位六十年とXデーの問題、それから中曽根さん（当時首相）の日本の「不沈空母」とか「四海峽封鎖」の発言などとの絡みで出てきたと思われていました。日文研の内部の人がどう考えていたかは別問題ですが。

したがって、『歴史評論』の一九八五年十一月号の討論の中で、私は『VOICE』八五年四月号に載った梅原猛氏の発言、「天皇は持続性のアイデンティティである。われわれの国家の伝統は人類にとって——日本人ではなく——人類にとってきわめて大事なものを秘めている。そのシンボルが天皇である」を引いて、新国家主義とのつながりの危険性を指摘しました。在位六十年というのは、一九八六年四月です。

ただし、これは日文研の問題というよりも、歴史学の中の文化論の問題だというように私個人も、また歴科協のメンバーや委員の方々も考え、我々の問題として、日本文化論の問題を正面から取り上げるべきだという議論が起きました。したがって、一九八六年九月の歴科協の大会では、青木美智男氏（当時、日本福祉大学教授・日本近世社会史）が「日本文化論」批判の視点と課題」というタイトルで報告——私はこれは非常にいい報告だと思っており、この報告にかなり影響を受けました——しました。彼が言いたかったのは、十八世紀後半から十九世紀にかけて民衆の自国意識の表出が、異文化によるインパクト——これは対露危機ですが——で本格化したと

いうことです。彼は文化論にずっと関心を持っていて、小林一茶の俳句からこの動きを詳細に摘出しました。なかなかすぐれた報告だと今でも思っています。

この時期、十一学会による日文研シンポが一九八六年十二月十三日に行われた際には、私は『歴史評論』の編集長として、日文研の何が問題かということをつく指摘しました。

一番目、極めて政治主導型でつくられていること。やっている方はどう思っているか知らないけれども、客観的にはそう動いている。

二番目、創設準備室長の梅原氏は、日本文化論の研究者として代表し得る哲学者なのかという問題。

三番目、これは後で仁藤さんからの話になることですが、歴史博（国立歴史民俗博物館）とか、大阪の民博（国立民族学博物館）の設立過程では、まず学会や学術会議の要望書が出され、学会の要求で、下からの積み上げ方式で、十年以上の期間を経て、ようやく立ち上がったのだけれども、日文研の場合は全く違うということ。

四番目は人選問題です。歴史学、民俗学、それから民族学などのような、学問としてまとまりがつくられている研究分野においてなら、運営協議委員の人選も可能かもしれないが、日本文化の研究者という点、いったい誰が運営協議委員になるのかという問題。

五番目、これは歴史博も同じ問題を抱えるようになりましたが、総合研究大学院大学に日文研がどう関わるのか、これが全くわから

なかった。

六番目、これはもう日文研だけの問題ではないのですが、「留学生十万人計画」というのを当時、文部省がやっていて、それで日本に来る留学生のために日本文化を教えなければいけないという要求があるというように当時は伝えられており、そこにおいて日文研がどういう役割を果たすのか、果たさないのか。

七番目、研究者間でいちばん関心があつたのはこれだと思うのですが、日文研作成のデータベースが、本当に関係する学会と研究者の利用できるものになるのかという問題でした。

先ほど言ったように、これは他人事ではなくて、歴科協という歴史科学運動団体の問題でもあるということ、一九八七年九月の大会では、岩井忠熊さん（当時、立命館大学教授・日本近現代史）——彼の出版は志賀重昂の日本文化論ですから、日本史の研究者としては文化史に一番詳しい人なのですね——が、日本近代史学史における文化の問題を、明治から戦中のフアシズム期にかけて整理して、日文研に対してはかなり厳しい、次のようなコメントをしました。

「そのような愚論が現実に行き、多くの人に影響を与えていることを無視してはならない。そのような説を振りまいた当の学者が首相に陳情し、その学者を所長とする国立の国際日本文化研究センターが設立されたのである。今となつては、そこに集まった学者の研究が、所長の学説とは無関係に自由な発展を遂げることを願わざ

るを得ない」。

これは京都内部の、いわゆる「新京都学派」に対する意見の一つだと思えます。

一方、私も一九八八年二月号で、これも中曽根さん——今の安倍さんとかなり似ている動きをしたと私は思っているのですが——が当時、声高に叫んでいた「戦後政治の総決算」というテーマを座談会で議論したときに、「最も科学的な根拠に立つた日本のアイデンティティを確立する「日本学」というものを「創設」する課題を負っているのが、梅原氏を所長とする国際日本文化研究センターなのである」と発言しました。

この時期は、まだどう動くかわからないわけですが。内部の方だけしかわからない。外からどう動くかわからないということ、一九八八年の九月から始まる歴科協の科学運動の活動方針には、次のように文章化されました。

「国際日本文化研究センターの活動の本格化と相まって、「日本文化論」の一層の非合理主義、反近代主義的イデオロギーの強化が予想される。同センターの動向に対して不断の監視・批判体制をとり、その理論内容にも分析を加えるとともに、歴科協大会テーマ「歴史における文化の創造」を基軸として、科学的歴史学の立場からの文化論を攻勢的に提示していく」。

私が編集長だったのは、一九八八年九月までです。その後は、中

世史の木村茂光さん（当時、東京学芸大学助教授・日本中世史）がなりました。ただし、私も編集委員としてまだとどまっていますので、この九月の大会の企画には意見を出しています。この大会では、安丸良夫さん（当時、一橋大学教授・日本宗教思想史）が「近代天皇像の形成」——これは後に本としてまとまるものですね——、山田忠雄さん（当時、東海大学教授・日本近世史）が「政治と民衆文化」という、青木さんの報告を補強する報告をしました。山田さんは十八世紀後半の研究者ですから、永井荷風の「江戸戯作者」論が文化論として成り立つのかという批判をこの報告でしています。

編集員として関わった最後の一九八九年九月の大会のテーマは、「伝統文化の継承と地域社会」となりました。このときには、哲学者の岩崎允胤さん（当時、大阪経済法科大学教授・古代ギリシヤ哲学）が「文化概念の理論的検討」——これは賛成するにしろ批判するにしろ、文化を論じる場合の格好の問題整理になっています——と、鬼頭清明さん（当時、東洋大学教授・日本古代史）が「日本古代における民族文化形成の諸前提」の報告をされました。鬼頭さんは残念ながらお亡くなりになりましたけれど、非常に視野の広い議論をされる方で、単に近世、近代ではなくて、古代における文化の問題を彼なりに考えた報告でした。

また、この年の活動方針のなかでは「国際日本文化研究センターについては、その動向を不断に監視し、日本学術会議諸学会の意向

が反映される運営体制、情報・資料の公開を要求するとともに、同センターの活動に対する批判的検討を強化する」と文章化されました。

私は、一九九〇年の五月より歴史学研究会の編集長に代わったために、『歴史評論』のその後の編集については全く関与していませんが、日文化論として最後に出したのは一九九一年二月号です。ここでは、中世史の細川涼一さん〔現在、京都橘大学学長・日本中世史〕が「梅原猛氏の日本人の「あの世」観論によせて」で、彼の文化論を批判しています。また、東独はもう崩壊していましたが、東独の研究者ジャクリヌ・ベルント〔現在、京都精華大学教授・美学〕とシュテフィ・リヒター〔現在、ライプツィヒ大学教授・日本学〕のお二人が、「国際日本文化研究センター」と題してドイツ語で論文を書いたものの翻訳が載っています。サブタイトルは「日本学研究 者への挑戦」でした。

一 歴史研究者として

第三番目は、私個人——幕末期から近代をずっと研究している人間にとって日文化が提起した問題がどうだったのかという個人的話に入ります。私個人としては、日本史研究の中で最も研究が遅れているのが、やはり文化と文化史だというように以前からずっと思っていました。日本文化論のようになかなか幅の広い議論とは別に、歴

史学においてもこの問題を取り上げなければいけないという思いから、大会テーマを数年間このテーマにしたのですが、私個人としては非常に日文化に感謝しているのです。皮肉の意味ではなくて。やはり文化の問題を自分なりに考えなければいけないということを実感させられたということですね。

それで、三つの論文を書かせてもらいました。一つは「天皇制ファシズムとそのイデオログたち」。これは日本文化論をやる場合に、歴史学では必ず頭に置かなければいけない国民精神文化研究所（国精研）を論じたものです。これが一体どういうメンバーでどう発足し、どう議論を立てていったかというのを明らかにしなければ、戦後の日本文化論というのはわからないと思ったのです。これは、現在はまだ廃刊になっていますが、『科学と思想』七六号（一九九〇年四月）に載せていただきました。調べる中で、いい勉強をしたと思っています。日本文化論というのは、やはり哲学で理論づけるということが、この国精研でも行われており、それをおこなったのがヘーゲル学者の紀平正美さん（一八七四—一九四九。元国精研事業部長）だったということです。

また、日本史から文化史を一番クリアに位置づけて、この国精研でも指導的な立場を最後までとったのが西田直二郎さん（一八八六—一九六四。国史学）。この紀平さんと西田さんの論理を理解できたのは、私としては大変勉強になりました。そして、この国精研での

研究の成果として、一九三七年三月に『国体の本義』が出たというのが私の確信になりました。『国体の本義』についていろいろ言う人はいませんが、やはり日本文化論としてはそれなりに筋の通った論だと私は思っています。そして、その理論提供は国精研がやった。それもその相当部分はやはり紀平さんではないかと見ています。『国体の本義』についてはいろいろな方が研究しているので、それ以上、私はコメントしません。

二番目は「天皇制イデオロギーにおける大嘗祭の機能——貞享度の再興より今日まで」という一九九〇年九月の歴科協の大会報告——私は歴科協をやめたけれども、結局ほかに報告をやる人がいないので貧乏くじを引いてさせられたものです——ですね。これはその年の十一月に挙行される大嘗祭の本質をどのように把握するのか、私の見解を述べたもので、大会報告として『歴史評論』の一九九一年四月号に掲載されました。

調べるなかで、日本古代社会の「心性」をコペルニクス的に発見した本居宣長の力量に改めて感服しました。国学が近世後期になぜあれだけの猛威を振るったか。これは日本文化論とも深く関係するのですが、やはりすさまじい力量を宣長は持っているということですね。これによって、国学がなぜ近世後期の日本社会にそれほど急速に浸透し得たかについても、私なりの理解ができました。大嘗祭というのは、即位した天皇が神に供御するものではないということ

です。神と共食する、その枠組みを発見したのはやはり宣長です。そして、この天皇に「神性」＝神的な性格を賦与するためには大嘗祭がどうしても必要だという議論が、非常にクリアに、国側から出されたのが、昭和天皇の大嘗祭のときでした。これは星野輝興さん〔二八八二—一九五七。元宮内庁式部職掌典〕の「大礼本義」というのが、異様なかたちですが、大嘗祭の直前、官報（昭和三年十一月七日）に報告されたのです。そこで、天皇に「神性」を賦与する儀式が大嘗祭だと、はつきり述べられているということを報告の中で紹介できました。

三番目は『日本文化大観』編集始末記——天皇制ファシズムにおける文化論と文化史の構造」で、これは科学者会議思想文化研究会編『日本文化論批判』（一九九一年十月、水曜社）に載りました。どういふことかという点、これは今の方はほとんど気にしていませんし、知らないと思うのですが、やはり日本文化とはどういうものか、というのが、戦時中、盛んに問われていまして、『日本文化大観』は、太平洋戦争の以前から準備されていたものですが、文部省が中心になって大々的な編集組織をつくり、戦時中、一九四二年の十二月に第一巻が刊行されているのです。よほどの豪華本です。幸か不幸か、二巻以降は敗戦により刊行できませんでしたが、当初の計画では、この歴史篇が上下二巻に加え、現勢篇が一巻、そして附録が二巻という、とてつもなく大規模な国定の文化論と文化史なので

す。

なぜこういう材料が手に入ったかという点、今、東大の史料編纂所にある「辻善之助史料」の中に原稿すべてがあつたのです。戦前・戦中は、史料編纂所が国のいろいろな企画に動員され、それで当時、所長であつた辻善之助大先生もこの『日本文化大観』の監修者として、原稿に赤を入れているのですね。監修者のところには、タイプ打ちの原稿が全部集まっていたというわけです。これはいい材料だということで喜んで執筆したのがこの論文です。

『日本文化大観』の歴史編を中心に見たのですが、日本文化史の論理展開としては極めてまとまっているという印象でした。これを見ないで戦後の文化史、文化論はできないと。これも皮肉ではありません。感心しました。ただし、この論理をつくつたのは、辻先生たち歴史学者ではなくて哲学者だということです。理論家として卓越しているのは、京都学派の高山岩男さん（一九〇五―一九三三。京都帝国大学教授）です。彼が古代から近世、近世ルネッサンス論から近代の文化史までの論理構造を見事につくつています。今後ともさまざまな国家権力側の日本文化論が試みられるでしょうが、その大枠はやはり軍部ファシズム期のそれと同一になるだろうとの確信が、この論文を書くことで得られたことは、自分としては大変いい勉強の機会を与えてくれたものとして日文研に感謝したい。これも皮肉ではありません。本当にこういう機会がないと日本文化論と日本文

化史を自分が勉強することはなかったと思つています。

以上です。

●倉本 ありがとうございます。特別委員会が、日文研が正常な軌道に乗つたと認定してくれた、というように受け取れましたので、少し安心した次第でございます。この経緯につきまして、内部におられた井上さんがどう感じられたかというのは、後でまたお話しただくとして、引き続き仁藤敦史さんにお話しいただきたいと思つています。

歴史民俗博物館と日文研

●仁藤 私がなぜこの場にいるのかを自分なりに考えてみるに、一つは一九八〇年代後半に東京の歴史学研究会の委員を二年ほどやっていた経験と、その時の感想から日文研問題を考えることです。歴研委員会には科学運動という部門があるわけですが、私はそちらのほうは必ずしもタッチせず、編集幹事とかの編集系の仕事をしていました。ですから、それほど日文研問題にはのめり込んでおらず、さらに東洋前近代史部会からは、私の属した日本古代史部会は歴研の右派だという批判もなされたように、私自身はノンポリなところもありました。

もう一つは、今の職場である国立歴史民俗博物館（歴博）が姉妹

国際日本文化研究センター設立経緯

- 1978年 10月15日、京都市、「世界文化自由都市宣言」発表
- 1980年 11月5日、「世界文化自由都市宣言に基づく提案」まとまる
- 1982年 昭和57年度科学研究費補助金、260万円。「日本文化の総合的研究に関する研究」（代表・梅原猛）
- 1983年 昭和58年度科学研究費補助金、360万円。「日本文化総合研究の研究体制のあり方に関する研究」（代表・梅原猛）
- 1984年 昭和59年度国立民族学博物館事業費、511万円。「日本文化研究に関する調査研究」
10月24日、中曽根康弘首相が京都訪問。南禅寺境内、野村別邸にて関係者と懇談。出席者＝今西錦司、桑原武夫、上山春平、梅棹忠夫、梅原猛
12月、昭和60年度予算案において、国際日本文化研究センター（仮称）調査費2000万円を国立民族学博物館に計上
- 1985年 4月11日、「国際日本文化研究センター（仮称）に関する懇談会」第1回開催（座長・中川秀恭）。以後、計3回開催
4月12日、「国際日本文化研究センター（仮称）に関する調査会議」第1回開催（座長・上山春平）。以後、計11回開催。他に「専門委員会」7回、集中検討会等を開催
7月25日、学術審議会開催、センター構想の推進について了承
8月29日、調査会議、「国際日本文化研究センター（仮称）の構想について（中間報告）」をまとめる
12月28日、昭和61年度予算案に国際日本文化研究センター（仮称）創設準備経費6400万円を計上。創設準備室5人
- 1986年 3月31日、調査会議、「国際日本文化研究センター（仮称）の構想について（報告）」をまとめる
4月5日、「国際日本文化研究センター（仮称）創設準備室」を設置。室長・梅原猛
- 1987年 5月21日、国際日本文化研究センター設立

機関という形で先行して設立されていたわけですが、その設立の経緯が、この日文研の設立を考える場合、比較の対象として重要ではないのか、ということだと思います。

個人的なことでは、二〇一四年に歴博は『国立歴史民俗博物館三十年史』を刊行したのですが、私はその三十年史の編集長をやらされました。会社だと社史の編纂は大概、窓際族なのですが、歴博でもそういう立場の仕事の一つかもしれません。そういうわけで自分なりに歴博がどういった経緯で出来てきたのかということを考えてたり調べたりする機会が与えられ、その辺のお話をするのが有益ではないかと思えます。

最終的には、東京の学会、いわゆる「左翼」かもしれませんが、井上章一先生のヒット作のひそみに倣えば、なぜ日文研「ざら、い」なのか、という理由あるいは背景をお話ししておく必要があると思えます。

まず、「国際日本文化研究センター設立経緯」（年表は『新・日本学誕生』角川学芸出版、二〇一二年から起こして掲げました）をご覧ください。ご存じのように一九八四年の中曽根首相との懇談から、とんとん拍子でさまざまな懇談会や調査会議、中間報告、基本構想などが進みまして、ほとんど三、四年で設立されています。これがレギュラーなのかイレギュラーなのかを考える場合、歴博との比較が重要な意味を持つてくるのではないかと思います。

なぜなら、日本史研究会などの決議文などを見ますと、かつて国立歴史民俗博物館設立に際して、日本歴史学協会をはじめとして関係諸機関、諸学会との協議に相当な配慮が払われたのに比べ、今回の計画は当初から一握りの人々だけの見解を基礎につくり上げられようとしたものだと言断せざるを得ないとあるように、刺身の「つま」かもしれませんが、比較の対象として述べられていることが指摘できます。

歴博の設立

歴博は、直近ではいわゆる「明治百年」記念事業というところからスタートするのですが、ご存じのように前史がありまして、「国史館」構想が一九四〇年の「紀元二千六百年」に、万国博覧会などとセットで計画されていました。オリンピックも、それに合わせて、前々回の「東京オリンピック」として計画されていたわけです。そのときに樞原神宮や神武陵整備などと連動して、「確かな歴史」を国民に教育する目的でつくられた、と言われていきます。記紀の神話に依拠した建国以来の天皇制の歴史をビジュアルに、天皇「真影」「天皇の肖像画」や「宸筆」「天皇直筆の文書」などを飾る、そういう「国体史観」を目に見えるかたちで示すのだ、ということが構想されたわけです。

その当時の計画案の文章などを見ますと、「建国創業より明治・

大正に関する絵画及び各種資料を陳列、公開し、場内を一巡すれば、何人といえども直ちに我が国体の核心を会得し得るがごとき大施設をなす」と。「この陳列館を特に国体殿堂と名づけ、本館の中心たらしむものとする」というような表現、あるいは「日本精神の作興運動」という意味において、社会の国民教育の上に一大貢献をさせた」というような趣意でつくろうということだったので、幸か不幸か戦争によつてこの計画は頓挫することになるわけですが、法隆寺金堂壁画の炎上を契機として、一九五〇（昭和二五）年に文化財保護法が施行され、そのころから国史館計画というものがもう一回

盛り返してきます。



一九五三年に国立民俗博物館設立運動——渋沢敬三（二八九六—一九六三。実業家・民俗学者）を中心に、そういうものをつくろうという動き——がありました。このときは民俗学会とか日本民族学会、日本人類学会、日本常民文化研究所などが文化庁文化財保護委員会へ「国立民俗博物館新設に関する建議書」を

提出します。一九六一年にも同じような建議書を出すわけですが、この当時（一九五五～五八年）は毎年予算要求するも却下されています。

一九六六年、総理府に明治百年記念準備会議が設置されて、明治百年の記念事業として、歴史民族博物館——この場合の「みんなく」は現在の「民俗」と違うのですが——その建設が決定されました。そのとき活躍されたのは坂本太郎さん（当時、國學院大學教授／東京大学名誉教授・日本古代史）です。現在、歴博の正面入口にアーチがありますが、その左側に坂本太郎さんの揮毫の碑が残っています。そういう意味で足跡が残っているわけですが、もともとの国史館のときには黒板勝美さん（一八七四—一九四六。日本古文書学）が尽力され、坂本さんはその遺志を継いだということです。

この国史館との接点を持ちつつ、明治百年と紀元二千六百年という国家の記憶を顕彰する目的を契機に、こういうことが盛り上がるわけでありませう。学界、とりわけ古代史では、この明治百年と連動して、いわゆる「大化改新否定論」というのが日本史研究会を中心に盛り上がります。これはご存じのように、明治百年を機に、明治維新と建武の中興、大化の改新というのが「三大維新」ということで見直されるなかで、それに対する学界側のリアクションとして改新否定論が出されたわけですね。石母田正さん（当時、法政大学教授・日本古代中世史）の『日本の古代国家』（一九七一年）が出たのも、

これに続く時期だったと思います。有名な万国博の太陽の塔をつくられた岡本太郎が、歴史・民俗博物館を両翼にして中央に民族学研究所を置く案を提案したりしております。この歴史の保存顕彰という意味で、歴史民族博物館の建設と並んで、明治天皇紀の刊行も並んで提案されております。

「歴史の保存顕彰」の四項目

- 1 歴史民族博物館の建設
- 2 明治天皇紀刊行
- 3 記録映画製作
- 4 産業殉難者顕彰碑建立

一九六七年に「国立歴史民俗博物館（仮称）に関する懇談会」というのが出来まして、建設計画や展示について協議をし、以下の三項目で合意がされました。教育と研究的性格、そして考古学の発掘も行うのだということ。総合展示と専門展示を二つながらに持ち、知的水準は高校生程度で国民全体を対象とし、観客が疲弊しない程度の展示を行うこと。古文書だけでなく模型・美術品を立体的に配置し、視覚的に理解させること。これは現在でもレプリカ展示というかたち、あるいは大型模型というかたちで実現しています。

一九七〇年に文化庁に設立準備室と設立準備班が設置され、七一年に基本構想委員会ができます。そのときの提案として、三十年程度の長期計画で、「発展する博物館」という理想を模索することが見えます。初代館長の井上光貞さん〔日本古代史〕が「百年の計」ということをしばしば言われたわけですが、こちら辺につながっていくお話ではないかと思えます。資料の収集・保存・研究と教育啓蒙要素の重視。さらには、「みんぞく」という字をどういう表現にするかということも相まって、名称問題が検討されました。

準備委員会の「中間まとめ」を経て、一九七二年に「国立歴史民俗博物館（仮称）構想案」として、さまざまに動きだすのですが、この前後で、用地の問題が出てきて、その解決の遅れで足踏み状態になります。そのときの候補地が多摩の弾薬庫、所沢補給廠、あるいは神奈川県の大磯音崎とか、池子の弾薬庫等々です。いろんな候補地があつたのですが、簡単には決まらなかつたのですね。当時、広い面積を確保できる場所といえば、戦後史を引きずつていたようで、旧日本軍や駐留米軍跡地などしかなかつたわけです。後に、佐倉城址公園に、堀田さんという大名家の末裔の市長さんからの運動があつて、ようやく正式に決まつたわけですが、内定してからも歴博用地への転換には課題が残っていました。

重要なのは、この間に先ほどの日本史研究会の提言の中にありましたように、日本歴史学協会の歴史民俗博物館特別委員会でさまざま

まな提言がなされたことです。このときにも、計画の公表と広い意見聴取が求められました。これは後々、日教研さんに求められたのと同じようなことだろうと思います。設立準備や展示構成に外部識者や学界の批判・援助を求めるとか、館外の有識者意見の恒常的な取り入れ等々の事柄が提案されているわけで、やはり学界がかなり責任を持つてつくつていくというスタンスが、歴博の場合は強く出ているわけがあります。

この当時、地域の文化財資料の所蔵データを調査した、通称「歴民カード」というものが約六万枚つくられました——現在でも残っていて、これをどう活用するかというのが今問題になつていますが。その当時は地域の資料を国が全部吸い上げるのではないかというところで、かなり危惧されました。悉皆調査をして、目ぼしいものを全部歴博に集めるのではないかと。

一九七五年以降に用地問題が解消したことによつて、基本構想が取りまとめられて、設立準備委員会が設置され、かなり具体的に進行していきます。七八年に井上室長が就任し（創設）、八一年に館として出来上がります（開設）。なお、創設と博物館の開設が少しずれているので、歴博ではこの両方を記念して祝っています。

こうして、ざっと流れを見ましたが、一九六八年の明治百年記念事業として建設が決定されてから、八一年の設置まで十三年、そして博物館開設までは十五年かかっています。もちろん用地問題

による遅れはあったのですが、かなり入念に基本構想を練って、学界の意見をかなり取り入れつつ、つくつてきたということがありません。少なくともこの点については日文研とはちよつと違うところで、そういう先行する事例があったので、東京の諸学会はかなり強硬に、「慎重審議」とか「白紙撤回」とかさざまな要求をしてきたのだろうと思います。

●倉本 ありがとうございます。歴博と比較すると、日文研の特殊性がより浮かび上がるという、極めて学問的な発表でございましたが、これに関しても、井上さんも少し歴博に思いがあったかもしれませんが、後ほどまたコメントいただきたいと思えます。

以上、主に東京を中心とした動きをお話いただきましたが、関西ではどういう動きだったかというのが、いま一つ我々にはよくわからなかつたので、それも含めまして、あとは宮地さんのご報告に對する思いもあるかもしれませんので、井上さんにその点をお話しいただきたいと思えます。

日文研と学問の自由

●井上 私は、ごめんなさい、まとまったデータを用意していません。思いつくことをしゃべります。

私は、ここに共同研究で来てくださっている人から、よく言われ

ることがあります。「あなたは自由な研究ができて、いいね。好きなことを調べられて、うらやましい」。ですが、三十年ほど前、日文研が創設されるというときに、専修大学の集いで吉田伸之氏（当時、東京大学助教授・日本近世史）はこう言いました。「日文研は学会との接点を持つていない。そんな組織に研究の自由は保障されるのか」と。しかし、私は正統的な学会に所属している研究者から、「あなたは自由でいいね」とよく言われます。

ちよつとけんかを売る格好になるといのかのやけれども、申し上げましょう。学会との接点を持たない日文研に研究の自由はないと言われた吉田氏へ、こう言い返してやりたいと思つたことがあります。「歴研に本當の意味の自由はあるのか」と。すみません、けんかを売りました。（笑）

日文研は今、人間文化研究機構から態度を改めるように言われています。もつと既成の学会と仲よつき合いなさい、さざまな学会の声を聞いて共同研究を組織しなさいと。ああ、三十年前の声はまだ聞こえてくるなと私は思います。しかし、私はそういうところとの接点を持たなかつたおかげで、自由な気ままな仕事ができたと思っています。接点を持たされるようになるかもしれない昨今を苦々しく眺めています。こういうことを皆さん、本當はどう思われるのでしょうか。

梅原猛と桑原武夫

梅原猛について申し上げます。梅原さんが中曽根総理に飛びついて、この研究所をこしらえてもらうに至ったことは確かだと思いません。それまでは相手にしなかった文部官僚が、中曽根康弘の号令が出た途端に前へ向かって動き出したことも確かだと思えます。

ですが、その一方で、梅原氏は梅原日本学を基礎にしながら中曽根康弘にこう迫っていました。「靖国には行くな。靖国には問題がある」と。中曽根氏のそばでそう言い続けることができたのは、当時、梅原猛だけだったと思います。このことを当時、批判派の人たちはどう思っておられたのでしょうか、中曽根氏のそばに寄るだけで汚らわしいと思う人もいるかもしれません。

思いついたので言いますが、日本文化論を私は結構重要だと思っています。自分の個人的な体験ですが、申し上げます。

私は、ブラジルのリオデジャネイロで二か月半ほど暮らしたことがあります。そのとき顎にけがをしました。病院へ行くと医者に言われました。「ベッドに横たわれ」と。私は靴を脱いでベッドに横たわったのですが、医者が怒りだしました。「どうして靴を脱ぐんだ。そんなところに靴を置かれたら医者や看護師が歩く邪魔になる」と。それで、私は渋々靴を履いたままベッドに寝ました。靴を履いたままベッドに寝た私は、どうしようもなく居心地が悪くなっ

たのです。日本人だから。自分のことをしみじみ「ああ、日本文化に支配された日本人だな」と思いました。こういうことは検討する値打ちがあると思います。哲学的な基礎が要るかどうか、天皇制や国精研がどうかかわるか、それはよくわかりませんが、日本文化論は考えてみる値打ちがあるテーマだと、身にしてみています。

歴研方面の矢面に立ったのは、たいてい梅原猛でした。ですが、私はこの研究所の最初の骨組みを、その大枠を設定したのは、桑原武夫〔京都大学人文科学研究所元所長・フランス文学〕だと思えます。どうして桑原武夫は矢面に立たなかつたのか。そちらも不思議です。

一九八四年、京都の野村別邸に中曽根康弘氏を迎えたときも、梅原猛が中曽根を口説く場面はありませんでした。桑原武夫が話を切り出すことが、宴席のクライマックスだったと思えます。

みみっちい話を今からします。京大人文研の所長を務めた桑原武夫に、中曽根康弘が理事を務めていた、おそらく拓殖大学から招聘の話があり



ました。当時の桑原武夫は、中曽根康弘を小僧つ子だと思っていたので、話を蹴りました。その中曽根康弘に十年後、こんどは桑原武夫がお願い事をしなければならなくなった。そのときに桑原が中曽根の前で頭を下げられるかどうかという、そのための一時間が野村別邸の宴席だったと思います。

梅原さんに聞いたことがあります。桑原さんはなかなか頭を下げてくれなかった。一時間、最後のぎりぎりによく「日文研をよろしく」と一言おっしゃってくださいました。これは梅原さんからの伝言です。私は関わっていないので確かとは言えません。もうこれ以上はやめましょう。

私は、晩年の桑原武夫に話を聞いたことがあります。横に宮地さんがいらつしやるので、かなり言いにくいことなのですが、申し上げます。彼は「日本の歴史家はあはや」とよく言っていました。

僕が一番印象的だったのは、明治維新の問題です。明治維新は革命じゃあない、明治維新でできたのは絶対王政でしかなかったと、一九八〇年ごろはまだそう言っていたのですね。そんなわけがないと桑原さんは言う。明治維新の革命性を否定する歴史家に対して、よくこう言っていました。「一八三〇年にフランスで七月政変が起こった。ブルボン王朝のシャルル十世が退位させられて、オルレアン王朝のルイ・フィリップが新しい国王になった。これを日本の歴史家は七月革命と呼ぶ。王家がブルボンからオルレアンに変わった

騒動を革命と呼ぶ。なのに、明治維新は権力が徳川將軍から天皇にうつただけだから革命とは呼べないと言う。革命の定義は一体どうなっているんだ」と。

フランス革命についてもそうでした。フランス革命は、ジャコバ独裁の最左翼に至ったときでも地主制を温存させました。日本の地主制と同じようなものが、フランスでも二十世紀まで続いたので。「ならば歴史家は、自分たちの理論にしたがいがい、フランス革命だつてブルジョア革命ではないと言い切るべきじゃあないか。フランスにはばかり進歩的なポジションを与えて、日本には出来損ないだ」という評価を与える。これは日本の歴史家が外国の歴史をよく知らないせいではないか、そんなことをよく言っていました。

もう一つ思い出すことがあります。桑原さんは一九三七年にフランスへ行きました。そのときにアンドレ・マルロー（一九〇一—七六。作家、のち文化相）やアンドレ・ジッド（二八六九—一九五一。作家）から、明治維新の革命性についていろいろな褒め言葉をもらったそうです。桑原さんは驚いたそうです。日本の左翼が絶対王政の成立だとは見ない明治維新に、フランス共産党のアンドレ・マルローが賛美の言葉を向けている。日仏の左翼が、正反対の評価を下す。これはどういうことなのかと、桑原さんはとまどわれた。世界の中で日本を考えたいという想いの根は、そこにあります。海外を知っている目で日本を照らし直すことが大事なんだと、そうい

うことをおっしゃっておられました。

梅原さんが設立に向かつて、いろんな「汚れ仕事」を——ちよつとこんな言い方はまずいかな。「ダーティワーク」も一緒か——まあ、水面下のお仕事をなさつたと思いますが、私は、この研究所の根っこに桑原武夫もいると思つています。

日研と海外の日本研究

先ほど、宮地さんが「一般向けの、市民向けの公開講演会は第三回目から始まつた」というようにおっしゃいました。ここは訂正させていただきます。第一回目からです。第一回目の講演会に講師として招かれたのがレヴィ・ストロース（社会人類学）でした。その懇親会へ、当時風邪を引いていた桑原さんは、別に出なくてもいいんだけれども、「レヴィ・ストロースが来ている以上、自分が出ないわけにいかない」と言い、風邪を押して出席されました。その後まもなく亡くなられました。風邪をこじらせて肺炎になつたんですね。私たちは日研のおかげで殉職されたような気がすると思つたりもしていましたが、それほどこの研究所には強い思い入れを持つていらつしやつたと私は思います。

私はその後、歴史解釈に興味がわくようになりました。私はいわゆる歴史研究者じゃありません。史料も読めませんし、古記録やら古文書やらも扱えないのです。だけど、海外の日本研究は大事だと

思うようになっていきます。これは桑原さんの考えに後押しをされているおかげだと思つていきます。

明治維新解釈に関して申し上げます。ソビエトの歴史家たちは明治維新で絶対王政が出来たという考えを否定しました。あれを、不完全ではあるけれどもブルジョワ革命だと規定したんですね。彼らは三三年テーゼにとらわれなかつたんです。そして、ソビエトの歴史は奈良時代や平安時代を中世だと捉えていた——日本では日本古代史と言つていられるけれども、ソビエト史学ではあれが日本中世史になっていきます。私は、ソビエトの見方が本質的に間違つていたと思いません。あ、今のロシアは日本史の水準に合わせて日本古代史という区分を設けていますよ。ですが、私はソビエト時代になされた日本史の捉え方とも、正面から向き合う必要があるのではないかと思います。それが国際日本研究の望ましい姿であろうと思ひます。そして、そういう仕事ができるのはこの研究所だと思つていました。残念ながら私は非力なので、なかなか思うに任せません。

言い漏らしていたことがあります。歴研にもソビエトの史学と向き合つてきた例がありました。一九五〇年代の、林基（民主主義科 学者協会歴史部会創設・日本近世史）が編集長を務めていたころの『歴史評論』です。あの頃には、あの雑誌でソビエトや東ドイツの日本研究がたくさん紹介されていました。

私はそれで今、林基に興味を持ち出しています。当初は、共産党

の所感派がスターリン体制にあおられたせいで、その延長上にソビエトの日本研究をもち出していったのでしょう。でも、五〇年代後半からのものは必ずしもそうではないと思います。もし林基のことをご存じなら宮地さんにお伺いしたいと、今日はどちらかというところな思いも強くあつて、ここに来ました。

本当に正直言うと、日文研の設立問題は、私の中でどうでもいいようなアイテムになり出しています。(笑) そういうわけにもいかないで、設立の話もしました。ですが、本当のところは、海外の日本研究をとんなふうにならなくて日本史の学会が受けとめ、咀嚼し、向き合ってきたのかを問いたい。日文研は、そこに向き合える組織だと、私は思っています。この研究所が出来たことにも、私は初めから意味があつたのではないかと思っております。

●倉本 ありがとうございます。

かつて二十五周年記念のときの座談会が何かで、井上さんがこの話をされ、途中で二回ほど泣きだしたことがありまして、今日も泣かれたらどうしようかと思つたのですが、今日は無事に終わりました。

それでは、鼎談ですので、まず宮地さんのご報告に対して仁藤さんと井上さんから、仁藤さんのご報告に対して宮地さんと井上さんから、井上さんのご報告に宮地さんと仁藤さんから、一言ずつ、短

めにコメントをいただけますでしょうか。それでは、宮地報告に対して仁藤さんお願いします。

●仁藤 宮地先生が事の当事者で、私はその当時外野にいたという存在なのですが、先ほど言われていた点で、国際研究集会が公開されていたかどうかというところを事実関係として確認したいということ。それと、井上さんのご発言とも関係しますが、梅原猛さんが靖国問題で委員をされていますよね。靖国に公式参拝するかどうか。あのなかで梅原さんが否定的に活動されたのか肯定的に活動されたのかという評価が、人によつて分かれているような気もするのですが、そこら辺のところをちよつと確認させていただきたいのですが。(井上補注・梅原は反対の立場を貫いた。しかし、ひややかに振り返り、少数意見も聞いたという口実を当局にあたえていたと見る人もいよう。当日には返答の機会がなかつたので、書き添える。)

●宮地 研究集会については、僕は加藤委員長がまとめた文章を引用して、第三回に公開になったというふうを書いてあるので、そう報告しました。

●倉本 事実関係で言いますと、『日本史研究』第三一三号というのに、「第一回国際研究集会をめぐって 加藤幸三郎」という署名



記事があり、これを見る限りはオブザーバー参加しているということなのですが。

●宮地 だからそれは、本人が申請してオブザーバーになっている。

●倉本 ですから、公開講演会はあつたということでしょう。

●井上 公開講演会もありましたし、学者どうしの研究集会にも、『日本史研究』の方々はオブザーバーとして参加されました。『日本史研究』の人は——ちよつと

言葉に気がつけますが——
「点検」に來られていましたね。「妙なことを言いだすやつはおるまいか」と。そういう方たちのために特別の席を二階に設けていました。

●宮地 あれは完全に第一回から公開？ 一般的な参加者にも？

●井上 国際研究集会は今も研究者の集いです。特別な要望があれば参加できます。ですけど、国際研究集会に伴う講演会は市民参加です。初めからそうです。

●宮地 ああ、そうですか。

●倉本 国際研究集会は、公開講演会とシンポジウムから成り立っていて、公開講演会は市民の方が誰でも來られます。シンポジウムは研究者限定です。ただし、外部の方がいきなり來られて入れるかどうかは、その都度その都度の情勢によります。

●井上 妙なことを言いますが、その第一回の講演会でレヴィ・ストロースが講じたときは若い学生や研究者が大勢集まって、京都會館を埋め尽くしたのです。人数はずつと維持されましたが、最後に梅原さんの番になると学生は減ったけど、そのぶんおばさんがどつと増えました。梅原さんは「俺には女性動員力があるんだ」とおつしゃっておられました。(笑)

●倉本 ちなみに、公開講演会はレヴィ・ストロース、ドナルド・キーン(当時、教授・日本文学)、梅原猛でした。シンポジウムは、上山春平(当時、京都大学人文科学研究所長・哲学)、中根千枝(当

時、客員教授・社会人類学」、河合隼雄（当時、客員教授・心理学）、中西進（当時、教授・万葉学）、大石慎三郎（当時、徳川林政史研究所長・近世日本史）、村井康彦となっています。

●宮地 では、そこは僕のやつを直しておきましょう。事実ですから。

●倉本 お願いします。それでは井上さんから、宮地報告に対するコメントをお願いします。

●井上 さつきのを「第一回研究会から公開の催しはあつた」と訂正してくださいということ。

それと、日文研を批判した研究者たちも客員教授として招かれることはあります。彼らの心の奥底まではわかりませんが、たいていの方は日文研暮らしをエンジョイしておられたと思います。こういう話を、この場で言うのもどうかと思うんだけど、私は梅棹忠夫氏とお話した折に、聞かされたことがあります。「日文研も、関連学会からの批判ということではそんなに心配せんでもええ。民博ができたときも「梅棹は帝国主義の手先や」と言うやつは、けっこうおつた。だけど、そんなやつが今うちの助教教授になつとる。研究会にも来とる。そういうもんや」と言い放つたはりました。こういう

言いつぶりをどう考えるかについては、いろいろあると思いますが、そういうリアリズムの浮かぶ余地はあるかもしれません。

●倉本 私も、日本史研究会から「点検」に來られていた当時の若手の古代史研究者が、あるとき、一緒に飲んでいたら、「実は、俺は日文研の公募に応募して落ちたんだ」と言っていたのを見て、安心しましたし、飲むたびに「自分の職場と変わってくれ」といつも言っているの、やはり世の中、そういう側面があるんだと思いますが。

私からもちよつと。宮地さんのお話の中で「正常な軌道」とかい言葉がありました。これは委員会や歴研からも、日文研は正常な軌道に乗っているという認識がほぼ共通のものであつたというふうに考えてよろしいのでしょうか。

●宮地 いいんじゃないですか。日歴協の特別委員会のレベルでは、もう梅原さんの議論でとやかく言う段階ではないと。きちんとした国立大学共同利用機関として活動しているということを確認して、そう書いたということです。

●倉本 ありがとうございます。少なくとも梅原所長の学説とは無関係に自由な発展を遂げていたことは確かだと思いますので、その

点では正常に——そう言う梅原さんが正常でないみたいですが、影響下でないという意味において——、自由にやっていたような気はいたします。

続きまして、仁藤さんの歴博関連のご発表に対して、宮地さんのコメントをいただきたいと思います。

●宮地 史学史というのは、かなりロングスパンで見なければいけない。それで、仁藤さんの報告にちよつとつけ加えたいのは、やはり東京国立博物館（東博）と歴博との関係がきちんと問われなければいけないということ。東博はご存じのように、明治期には総合的な博物館として建てられたけれども、結局、昭和になると美術史中心の博物館になった。歴史の展示が全部撤去されたこと、国史館構想が表裏一体なのだという、この話をやらないとなぜ国史館構想が紀元二千六百年に出てきたかというところの説明がつかない。これは明治以降の東京国立博物館の性格の変質の問題だということですね。

それから二番目は、やはり博物館というと、こんど京都に移ると言われている文化庁との問題があつて、文化庁の発想としては、当初から博物館は文化庁の管轄だというつもりで動いていたのですね。これは、先ほどの梅原さんの「ダーティワーク」と一緒になるのかどうかかわらないけれども、やはり文化庁が入ってくると、博物館

としてはうまく運営できないということで、かなり強引に国立大学共同利用機関に移行させてしまったのですね。

僕が歴博の館長をやっているときまで、文化庁が非常に冷たい目を向けていたというのは、そういうことなのです。だからその二つだけは、事実問題として落とせない。やはり博物館というのは、そういう、いわば外的な強制をいつも持ちながらやらざるを得ないのが、日教研と違つていて、そういう意味では日教研が本当にうらやましい。僕は山折哲雄さん（日教研名誉教授・宗教学）がこの所長のとき、一緒に会議を何回もやったから、そうつくづく思いました。

●倉本 ありがとうございます。坂本先生や井上先生はそのことをよくおつしやつておられたそうです。今やもう、あまりうらやましがられる機関ではなくなっているような気がします。それでは、井上さんからお願ひします。

●井上 先ほどの文化庁のことも、きちんと活字にするのは、デリケートな部分もあつて、まずいのかもしませんが、鼎談といういわば話し言葉なので、やはりどこかに残しておくのが大事だと思いますし、記録にとつておきましよう。

●倉本 録音資料と活字資料。口頭行政と文書行政を別個に使い分

けましよう。

●井上 そういところから何かちよつと欺瞞が始まると思うんだけれども。

●倉本 そういところから「歴史学者はあほや」とい話になるのですね。

●井上 そういところからも「歴史家はあほや」とい話になるのかもな。

仁藤さんにお尋ねしたいことは、そんなにないのですが、ちよつと言葉を濁された部分にこだわります。歴博は関わりのある学会と事前に相談できた。いろんな要望も受け入れている。でも、ひよつとしたらそれは用地問題でまごついたせいかもしれない。本当のところどつちなんでしょうか。用地問題さえなければ、結局、日文研とそう変わらないコースをたどつたのかという、これが第一点です。

第二点として、各学会の要望を聞き入れることで本当に学問の自由は支えられるのかという問題があります。これは私個人の例ですが、私はここにいるおかげで何の制約もない勉強を続けることができます。それを苦々しく眺めていらつしやる方が大勢いるのも

わきまえています。でも、口幅つたい言い方ですが、私自身は、そういう姿勢を保つ人間がぼつりぼつりといふことも大事だと思つています。「そんなのは大事じゃない」と思われるなら、そうおつしやつてください。

●倉本 仁藤さんはそのころ歴博に関わつていたわけでないから。

●仁藤 そうですけど、いわゆる「後世の歴史家」の立場で言えば語れることはあります。

●倉本 わかる範囲でどうぞ。

●仁藤 まず、宮地先生のお話について。手元のメモにはその辺も書いていたのですが、関東大震災で被害を受けた上野の帝室博物館の復興運動に黒板さんが参加をしたことから、歴史部を廃止して東洋古美術を中心とした大博物館という計画が、国史館のスタートといえはスタートです。その歴史部を廃止といふところを逆手にとつて別機関、国史館をつくるという、帝室博物館とは別に歴史だけで国立の大博物館を計画というところが、本当の意味の前史であろうと思ひます。

あと、文化庁系列から離脱をするという、井上光貞さんの大技

——大学共同利用機関に転換したということ——も大きなエポックだろうと思います。そこで、いわゆる学芸員的な扱いから教員・教官的な、それなりの自由な研究ができるところに転換させたことはやはり補足すべき点だろうと思います。いまだに文化庁系の某機関の方から、「うちの機関では九九人までいったのだけど、百人目になろうしたときに歴博ができて、ついぞ百人にいかなかった」という弁慶の刀のような話を聞いたことがあります。定員まで文化庁から持ってきたんですね。だからそういう問題は確かにあります。

次に、学問の自由を取るか、それとも学会の共通コンセンサスを得るかという、なかなか難しい問題ですが、用地問題でもめている間にそういう提言があつたことは、客観的な事実としてはそうなのですが、かなり要望は聞いていたのではないかと思います。だから、そのときの提言が運営にかなり生きています。先ほどの、文化庁から冷たい目で云々というところも、自由な研究を保障せよということが学会からの要望として盛り込まれたことが重要です。

いわゆる教科書裁判もあつて、歴博は国定教科書を展示する施設なのかと、かなり疑いの目で見られたところもありました。それでしたらタブーがあつて、教員・教官が歴史の展示を解説するのは、いけないとは言いませんが、解釈を押しつけず自由な目で見てくださいという立場を取りました。だから一つの目録で解釈を固定しないという姿勢が、私が入つたところにはありました。

●井上 「解説してはいけない」というのは、自由が保障されていないと思いますよ。

●仁藤 まあ(笑)、それは極端な解釈だとは思いますが。実際、ギャラリートークみたいなどころでは「私はこう思うのですけどね」というのは言っていました。ただ、公式見解として表明しない、一つの色に染めないというところは堅持していたかなと思います。だから、制約の中の自由みたいなどころはあると思います。

●倉本 ありがとうございます。あのう、学会、学会といつも出てきますが、大体こういう問題で出てくる学会はいつも同じような学会が多くて、例えば日本歴史学会は学会の体を成してはいいませんが、雑誌の購読者数は一番多い。確かに歴研はネットで言うところの「日本最大最高の学会」ですが、日本歴史学会、『日本歴史』をとっているその他大勢の人とか、あと史学会は多分そういう声明にはほとんど関係していない。それを逆手に取られると、右派の学会だからということになるのかもしれませんが、一般的な名もなき歴史学者、その他大勢の学者はどう思っていたのだろうかというのを、実は割と知りたいところもあるのです。

それはさておきまして、それでは井上報告に対して、宮地さんからコメントをいただきたいと思っています。

●宮地 やはりこの問題がかなりこじれたのは、先ほど「ダーティワーク」というふう井上さんはおつしやつたけれども、梅原さんの議論というのが、歴史学界では非常に嫌がられていたことですね。あの議論は嫌だ、「縄文の心」なんて平気で言う、こういう人が所長になって本当にいい日本文化を研究できるのか、というのが、僕個人の印象でした。ただし、そうしないと中曽根さんのオーケーが出ないだろうということも事実ですね。だからこれは、今になってかなり自由に僕も発言するけども、事がもめたかなりの部分は、梅原さんのあの学問にあると思う。学問というか、哲学でもないし歴史でもないし、ああいう思いつきを平気で言うというのは耐えられないですね。これは井上さんの、中にいた人とは全然違う感覚で、要するに東京の人間が感じることなのです。

先ほどの桑原さんの議論は当然、近代史をやっているから私もよく知っているし、彼がやった人文研の共同研究の成果というのは非常にいいですね。だから桑原さんがやっていれば、私はもう少しずんなり、学会も文句を言わずに受け入れたと思うんだけど、彼は表面に出ないですね。

●井上 いやいや、十分出ていたと思いますよ。

●倉本 関西では出ていた。

●井上 十分出ていたと思います。

●宮地 しかし、どうも東京で目に入るのは、やはり梅原さんのやったいろんな関係ですね。

●井上 ただ、研究者に目立つたための努力をなさないと、ちよつとつらいところがあるのではないのでしょうか。私は、この国際性に関する構想は、桑原武夫の考え方が骨になってできていると思っています。

●倉本 ありがとうございます。では仁藤さん、お願いします。

●仁藤 先ほども少し申し上げましたが、日文研さんでは「日本学」を標榜されていますが、「日本学」はどうかたちで学問的に総括すべきか、おうかがいしたい。かなり広い範囲の学問に及ぶわけです。歴史、考古、民俗、文化人類学等々に建築とかも入るわけですから。日文研のこれまでのスタイルは、歴博における広義の歴史学という立場とは異なり、当初からやや文化人類学的なものが強いと感じるのですが、「日本学」の総括の仕方はどうあるべきか。その中で、梅原猛さんの学問の立場をどう評価するかという問題も出てくると思うのですが。

最近のNHKスペシャルでも、諏訪の御柱おんぼらの話をいきなり縄文起源に持っていくという番組があったのですが、その話は昔、梅原さんが言われていたことです。古代とか中世の諏訪大社がどういう存在形態であったかということをすつ飛ばして、いきなり縄文に行ってしまうという発想が果たしてどこまで学問的か。そうした方法論に対して、個人的にはやはり抵抗感があるのですが、どうお考えなのか。

もう一つ、「世界を視野に」というのは当然なのですが、ただ一方で、欧米の東洋学というのは、必ずしも日本に留学していなくても独立完結して研究できる傾向が最近かなり強くなり、日本の文献とか一次史料などは見なくてもいい、そういう東洋学という学問ジャンルというか、スタンスが出来上がりつつあるようです。それについてはどういうふうにお考えなのか、お聞きしたいです。

●倉本 ありがとうございます。では井上さん、お願いします。

●井上 お二人とも要するに、日研と梅原猛の個性を混同している、そうおっしゃるわけですね。その混同の仕方は、科学を標榜する学会の視線として、一体どうなのかと思います。本当にそれは科学的な視線なのだろうかと思えます。

●倉本 所長の学説とは無関係に自由な発展を遂げていると認めていただいたのですから、もはや――

●井上 ああいう所長で所員に自由な仕事ができるのかという疑問についても、ひとこと。私はあの所長が、私の気ままな仕事をハラハラしながら見守り、面白がってくれたんだと、言いたいわけです。

●倉本 梅原さんの学説というか書かれたものと、日研のコーディネーターとしての梅原さんは別個に考えていただければと思うのですが。

●井上 ただ、私の中にも、梅原さんに――ちよつとこれも言い難いけど――困ったなと思う部分、「ああ、おかしなことを言うたはるな」という部分があります。ありますが、それと同時に、梅原さんを温かく感じる部分もあります。梅原さんが想定外のことを切り出してくれたおかげで見えてくる部分だってあったということです。

『隠された十字架』に「トンデモ本」めいた一面はあったと思います。思いますが、あれを読んで目を見開かされた部分が私にないわけではありません。専門の歴史家でも、馬鹿にしつつ、何点か「へえつ」と思うところはあったのじゃないでしょうか。彼は哲学者ですし、いわゆる専門の歴史学者でない人が歴史をいじるわけで

すから、不備ばかりをあげつらうのは生産的じゃないと考えます。ほとんど自己弁護みたいになってしまいましたか。

次は「日本学」でしたか。

●倉本 日本学。

●井上 日本学、ジャパノロジーは、たとえば、アーネスト・サトウ (Ernest Mason Satow 一八四三—一九二九。駐日イギリス公使など)

——彼は別に考古学者でもないし歴史学者でもない、外交官なんだけれども、日本文化研究にいどみましたよね——やチェンバレン (Basil Hall Chamberlain 一八五〇—一九三五)らの学問を指しています。ついでに言うと、日本学のあり方は日文研でも問題になりました。

日文研が発足した頃に、海外の研究者はもう日本的な姿勢を持っていませんでした。社会学者が日本をどう見るか、経済学者が日本をどう見るか、そういう情勢になっていました。アーネスト・サトウ、チェンバレンのような日本学はもう、はつきり言って事実上失われていました。それでいいんだという立場ももちろんあります。だけど、それと同時に、私たちはひよつとしたら何か貴重なものを失っているかもしれないという含みが、あの「日本学」という言い方には込められていたと私は思っています。専門分化のおかげで大らかなことを見失っている可能性があるなという想いがね。

ついでに言うと、海外の日本研究者に、倉本さんと同じ水準で藤原道長を読むことはできないと思います。だけど、そんなことを言いだしたら「海外の日本研究にはまったく意味がない」と言っているのと同じになりませんか。日本の研究者と古文書を読む、土器の発掘につき合う、その水準では並び得ない人が持っている可能性というものを、私たちは大事にしなければ。これはさつきと一緒ですね。「素人の可能性を侮らんといってくれ」と言っているんだけれども。とりわけ歴史学なんかは、素人で好きな人も大勢いるわけだし、どこかで人民との連帯をうたうことも大事なのではないかと思うのですが、どうでしょうか。人民が読めない論文ばかり書くのが本当にいいことなんでしょうか。すみません。

●仁藤 いえいえ、今の話を聞いて邪馬台国論争を思い出しました。

●井上 もちろんそうなんですけど、それだけじゃない。フランス文学の桑原武夫が明治維新を論じる。人類学の梅棹忠夫が封建制を論じる。そこにも私は可能性を見たいわけです。

●仁藤 アマチュアも参加できる邪馬台国論争、そういうところが真に「日本学」になるのかどうかというのはちよつと気になるところもあるのですが、裾野を広げるといふ意味では、全然問題ありません。

せん。

●井上 ごめん、もう一つ、イタリア・ルネッサンスを研究する人の輪に、イタリア人は一割ぐらいしかいないのですよ。過半数はアメリカです。三割ぐらいがドイツです。イタリア・ルネッサンス研究の本場は、少なくとも量に関するかぎりアメリカです。安土桃山時代研究の本場は日本です。これがいいことかどうかという問題があります。私たちの日本文化研究は、ほとんど日本人だけで寄つてたかつてやってきているわけです。イタリア・ルネッサンス研究の国際性に追いつくべきだとは言いませんが、また追いつけもしないでしょうけど、志としてそういう方もありうる、ということは念頭に置いていいのではないかと思います。

●仁藤 今のお話を聞いていますと、やはり、良質な論文なり一次資料なりを海外に向けて発信するということも、ここの機関の大きな使命として重要ななと思つたのですけれども、そこら辺はいかがですか。

●井上 人間文化研究機構は、あるいは文科省もかな、そういうところを評価せずに、「もつと日本の学会に敬われなさい」と言うてくるんですよ、この頃。それを困つたことだと私は思っているんで

す。

●倉本 井上さんが梅原さんの正統な後継者であることがよくわかりましたけれども。

●井上 国際性については、桑原さんの想いをなぞっているつもりなんだけど。(笑)

●倉本 すみません。私が日文研に呼んでもらつて本当によかつたなど思うのは、あのまま東京にいたら、梅原さんと一度もしゃべらずに終わってしまったでしょう。井上さんとも一度もしゃべることなく終わってしまったかもしれない。ご本人としゃべると、「あつ、この人たちは立派な、すばらしい研究者だ」ということがよくわかります。直接見ないとわからない。東京から非難するのは片面しか見ていないということがわかつて思うのです。

ちなみに私は、古記録学基礎演習というものを日文研でやっていますが、そこは超多国籍でありまして、なるべく外国の人にも一次史料を読んでもらいたいという趣旨で、データベースも含め、やっています。その演習には、日本、中国、韓国、ベトナム、カザフスタンからも来られています。そういう国際的な動きもあるということをお伝えしておきます。

さて、お三方の発言は大体尽くしたと思いますが、傍聴の方にも、何かしやべりたくて仕方がない方が多分たくさんいらつしやるでしょう。それでは、一言ずつ、できれば「あの頃の私と日文研」を含めてお話しただければと思います。それでは加藤友康さん（東京大学名誉教授、史料編纂所元所長・日本古代史）、お願いします。

●加藤 あの時といいますが、私はちょうど史料編纂所に入つて何年目かで、今のようないい事はありません……。学会の議論でも、日文研の設立に関わつてということでは、梅原さんと中曾根さんの、あの意味で宣伝というのでもない、戦略的なスタンスで言われているようなところにしか、関心がなかつたものですから、今日のお話を伺つて、いろいろと複雑な過程をとっているなということがわかつて、非常によかつたと思います。

もう一つだけ、私に即して言うと、実は史料編纂所でデータベースをつくるいろいろなとやつていまして、宮地さんの今日のご報告にもある日文研作成のデータベースがどういふものになるか不明でした。設立当初、実は史料編纂所で何人かで調査チームをつくりまして、星野聰さん——『続日本紀』などやつていらつしやつて、当時、京都大学の大型計算機センターにいらつしやつた——のお話をうかがつたり、日文研にもお邪魔して笠谷和比古さん（八九年より助教・日本近世史）に直接、ご案内いただいた。データベース

の話というよりは、どちらかというとそのラウンジでお目にかかつて、そのあと円形の図書館を案内いただいて、「すごいだろう」ということを言われたのですが。

ただ、そのときにまだどういふデータベースをつくるかという方向が決まっていなかつたと思うのですね。史料編纂所は、設立の目的からして、史料集をつくつていくという、それに特化してやつていこうというかたちで来たわけですが、日文研には非常に現存の多様なものがありますね。では、トータルとして何を指しているのか、現時点でどうなのかということ、倉本さんのほうにお伺いしたいのですが。

●倉本 トータルとしては、一定の方向性に行っていないというのが現状です。また、今、公開しているデータベース以外にも莫大な数の埋もれているデータベースがありまして、これをそのまま残しておくべきかどうかという議論をよく会議でやつたりするのですが、結果的に個々の研究者が自分のやりたいことをやるということになっていきます。

ただし、特色としては、一つは春画、もう一つは妖怪がベースになっています。じつは、自慢じゃないんですけど、去年初めて、私のやつた古記録データベースがアクセス数一位になった。ということで、これが日本研究にとつていいことかどうかは別として、

ちよつと違う傾向になりつつあるのかなと思います。ただ、だんだん人も入れ替わりますし、変わっていくのだらうと思います。それぐらいしかわかりません。

関幸彦さん〔日本大学教授・日本中世史〕はその頃は、あまり関わっておられなかったでしょうか。

●関 私は感想だけです。私は実は文部省の教科書調査官を十四年間してしまってますね。その文部省に入った当時から梅原猛を、役所の中で――準備室があつたのですね。階は違っていましたけど――、「あつ、あれが梅原猛だ」という、そんな感じで見ていました。日文研問題というのは、ファジーにはこういうような話なんだろうなというふうに思っていましたけれども、今回、宮地先生含め、皆さん方の話を聞いて、ぼやつとした輪郭がより線を持って鮮明になったという感想を持ちました。

やはり私も役所にいた関係で、しかも文部省の中の教科書調査官というのは、歴史家の中における一種異端的な雰囲気というか風情をずうっと持たされていきましたので、そういう針のむしろのような状況の中で自分がどういう立場で仕事をしなくてはいけないのかという部分と重なって、今回の日文研の話というのはよくわかりません。

京都の学会といいますか日本史研究会なんかに参加しますと、あ

る著名な研究者が、日文研に移籍したこれまた著名な歴史家を名指して、「あいつは裏切り者だ」というようなことを公言してはばからなかった。もちろんこれは後の飲み会の席上ではありましたが、おそらく、そういうような雰囲気学会――歴史なり日本史研究会なり、いささか問題意識の旺盛な関係の学会――の代表者の発言として出たんだろうと。ただ、その代表者の発言に象徴化されているように、僕自身の思いとしては、日文研の状況、そこで置かれている研究者の人たちの思惑というのが、多分、自分に少し重なる部分があつたので、何となく気持ちとしてはわかるな、というのが正直なところですね。

ただ、何でもそうなのですが、ある組織をつくるときって、組織のトップとか長というのはある種ダーティな役割を担う。それで、その後のエネルギーというのはその部分を踏み台にして、凝固作用としてつくり上げていくものだと思うので、やはり梅原猛という存在そのものが歴史的な役割を果たしたのだらうかと、私はそのように思っております。個人的な感想です。

●倉本 ありがとうございます。

●井上 ちよつと質問していいですか。

●倉本 はい。

●井上 多分、冗談だと思うのですが、梅原さんはよくこう言うたはったんですよ。「自分は文部省に設けられた準備室へ毎日、朝から通っていた。文部官僚は嫌がっていた。早うあの人を追いつき出さなあかんと。それで、この研究所を早くつくってもらえたんじやないか」。(笑)これはうそですよ。

●関 でも、嫌がっていたというのは、何となく、おいとしてはありましたけどね。何だ、こいつはという感じで。

●倉本 それでは、保立道久さん〔東京大学名誉教授、史料編纂所元所長・日本中世史〕、どうでしょう。あの頃、八五年から八八年ぐらいいですかね、どういう動きで、どういう思いを持っておられたか。

●保立 私はほとんど記憶がないのですが、ただ、指導を受けた研究者が戸田芳実さん〔神戸大学名誉教授・日本中世史〕でした。戸田さんが、この桂坂にご自宅を作られた時にうかがったら、「茶室を造った。日文研が近いので、今度、村井くんが来る。茶室で二人、茶を飲むのが楽しみだ」とおっしゃっていました。

学問と人間関係は別です。京都の研究者のなかでは、日文研につ

いて、いろんな考え方、それからいろんな感じ方があるのだろうと思います。

この前、安丸良夫さん〔一橋大学名誉教授・日本近世・近代史〕が亡くなられて、安丸さんについて小論を書いたのですが〔『現代思想』二〇一六年九月臨時増刊号〕、安丸さんは、上山春平さん〔京都大学名誉教授〕に対する感謝が強いことを知りました。だから、井上さんのおっしゃる桑原さんたち、要するに京大の人文研の流れを受けた、あの頃の京都の学界がどういふ問題を抱えていて、どういふ議論があり、今どういふふうを考えているのかというのは聞いてみたいと思います。

たしか『日本史研究』の一九七〇年ぐらゐの号（保立注：『日本史研究』五九号）にシンポジウムの記録があつて井上清さん〔京都大学名誉教授、人文科学研究所元教授・日本近代史〕と桑原さんと――

●井上 六二年です。

●保立 六二年ですか。桑原さんと、上山さん、梅原さんもいらつしゃつたと思います。あのシンポジウムについては河音能平さんの著作集の第三巻の解説を書いたときに、その関係で必要なことを書いたことがあります。あそこには河音さんのほか、確か安丸さんも出ていて発言されていたと思うのですが、非常に激しい議論でした。

もちろん直前に、上山さんが「大東亜戦争」という言葉が彼らの世代にとつてもつ意味を論じられて、非常に大きな議論になり、それも伏線となつていろいろな議論があつたわけです。ただ、今、読んでみると、桑原さんや上山さんの意見の持つていた意味というのは、あると思うのですね。

とくに上山さんについては「思想の科学」研究会の関係でも興味をもっているのですが、僕はいま、神話論をやつていて、上山さんの仕事は大事なところを衝いていてと考えています。やはり歴史学や日本の文化を研究するという立場からは、戦後のいろんな議論の全体を点検してみても、さまざまな立場を理解しなければならぬ。梅原さんを含め、現代の社会や政治の状況に対して強い危機意識があり、そこに明らかに共通の認識、コンセンサスが出来てきた部分がありますので。

もちろん、安易な、「まあまあ……」という議論は、事柄が事柄だけにできないと思います。それを考える上では、やはり宮地さんのおつしやつた国精研ですよ。あれは大変大きいので——人類学の岡正雄さん（一八九八—一九八二。民族研究所）も関係しているわけですから——、国精研の問題を起点にして、戦前戦後の全体の学術・文化の思想史みたいなものを考えなければいけないと、お三方の話聞いて思いました。

●倉本 ありがとうございます。それでは、三人の先生方に、最後に一言ずつコメントをいただいて、お開きにしたいと思います。今度は逆の順番で、井上さんからお願ひします。

●井上 同じことの繰り返しなんだけれども、申し上げます。私はいろんな方々に「あなたは好き勝手ができていいね」と言っていたのだのと同時に、「あなたの存在が迷惑だ」とおつしやつてもらったこともあります。というのは、「うちの学生が君の本を読んで面白がつて、同じようなことをやろうとする。そんなことをやつたら学会では通らないからやめておけ、と——」

●倉本 歴史学の方が、ですか。

●井上 社会学の人から言われることが多いです。それで「——あなたのは真似るなと言うのが煩わしいんだ」と面と向かつて言われたことが、何度かあります。院生さんを持つて、どこかに就職させなければならぬという立場に置かれた人は、やはり不自由なんだなと思ひ知らさせられます。だから私はここが大学院を持つことに反対だつたんですよ。できるだけ自由でありたいと私自身は思っているのですが、残念ながら諸般の事情でもう、その自由は綻びだしているし、いわゆる「第四期「科学技術基本計画」」にはなし崩し



にされそうな様子が見えてくるので、切ないな、と思ってるのがこの頃です。以上。

●倉本 ありがとうございます。それを踏まえて日文研をよい方向に持つていっていただきたいと思います。

それでは、次に仁藤さん、お願いします。

●仁藤 いろいろきついこと、失礼なことも申し上げたかと思うのですが、自由な研究環境で「日本学」という新しい枠組みを模索して、拡大・発展させることをお願いしたいというところがあつて申し上げました。一方で、私の勤めている歴博との差異化も意識して、それぞれが並び立つように、共存共栄で行っていただければというふうに思います。

今日は全然お話が出なかつたのですが、韓国にも同じような、「韓国学」という枠組みがあつて、それなりに国家の機関が予算も使っているわけです。そこをどう意識しつつ運営するのかというも重要ではないかと思えます。以上です。

●倉本 ありがとうございます。では最後の締めで、宮地さん、お願いいたします。

●宮地 井上さんの話を聞いて、うらやましいなというのをつくづく思いました。なぜかという、私は一九七三年に史料編纂所へ入り、私個人の研究としては戦後史をやるうと思つたのですが、あそこでは、一番新しいのは廃藩置県、「一八七一年七月十四日以降はやつちやいけない」つて非常に厳しく叩かれたのですね。そういう枠の中で仕事をやらなければいけない、そして、自分の研究もそれに絞らなければいけない、というところで僕はやつてきた。

歴博に移つたときにはそういうバッシングはなかつたけれども、あそこで一番欠けている常設展示——戦争展示をやらないと、日本の歴史博物館としてよその人に見せられない、ということ、館外の人々の協力を得て、なんとかそれができたのですね。やはり義務がある。仕事の目的がある。それをやらないと、国民の税金を使つている機関として——私立大学ならいいですよ——よいのか。僕は非常に古いタイプだから、やつぱり給料をもらつているならそれなりに仕事をやる、研究もその中でやる、という考えで来ています。だからこれは井上さんとはかなり違う大学の教員としてのあり方なのです。ですから僕はつくづくうらやましいと思つて。

ただし、梅原さんがああいうお考えを持ちながらも、出発当初か

ら内部が完全に自由だったということは、ものすごくいいことだと、僕も研究者の端くれですから、思います。だけでも、その個々人の完全な自由さも、その当初の目的であった「日本文化とは何か」、日本人のアイデンティティとは何か」を研究する上で一番いい組み合わせ方をやらないと、個々人が勝手に自由なことをやって「一体何だ」というように必ず言われるに違いない。そう言われなくても、日本学なり日本文化を科学的に明らかにできるかできないかが、このセンターに課せられた課題だと、これは将来の問題だと私は思います。

●倉本 ありがとうございます。将来の目標までご指摘いただきまして、まさにそのとおりだと思います。一度この会議に出ただければ、我々も結構大変なんだということをよくわかっていただけたと思いますが、いつまでも、少なくとも外からはうらやましがられる機関であつてほしいなと願う今日この頃であるということで、この鼎談を終えたいと思います。皆さんどうも長い時間、ありがとうございます。(拍手)

(了)